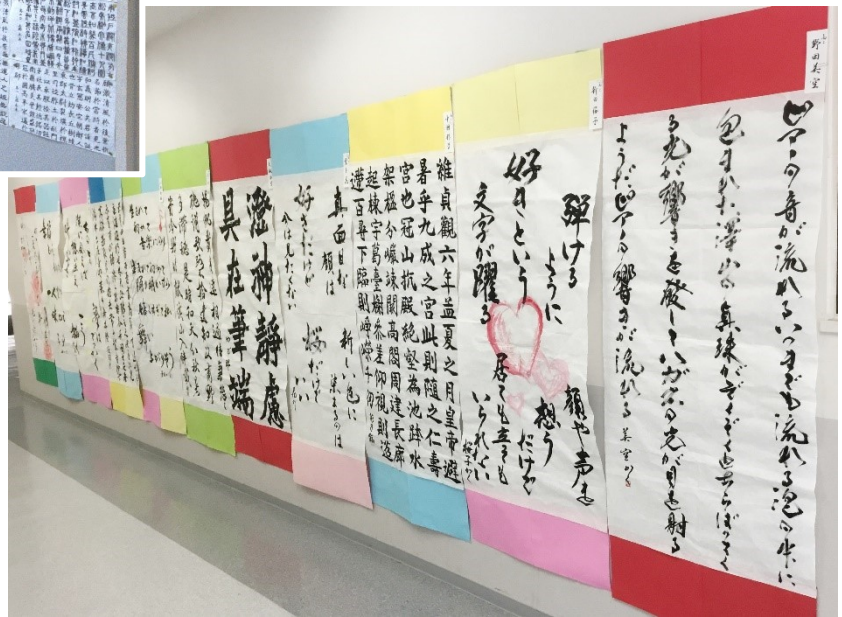
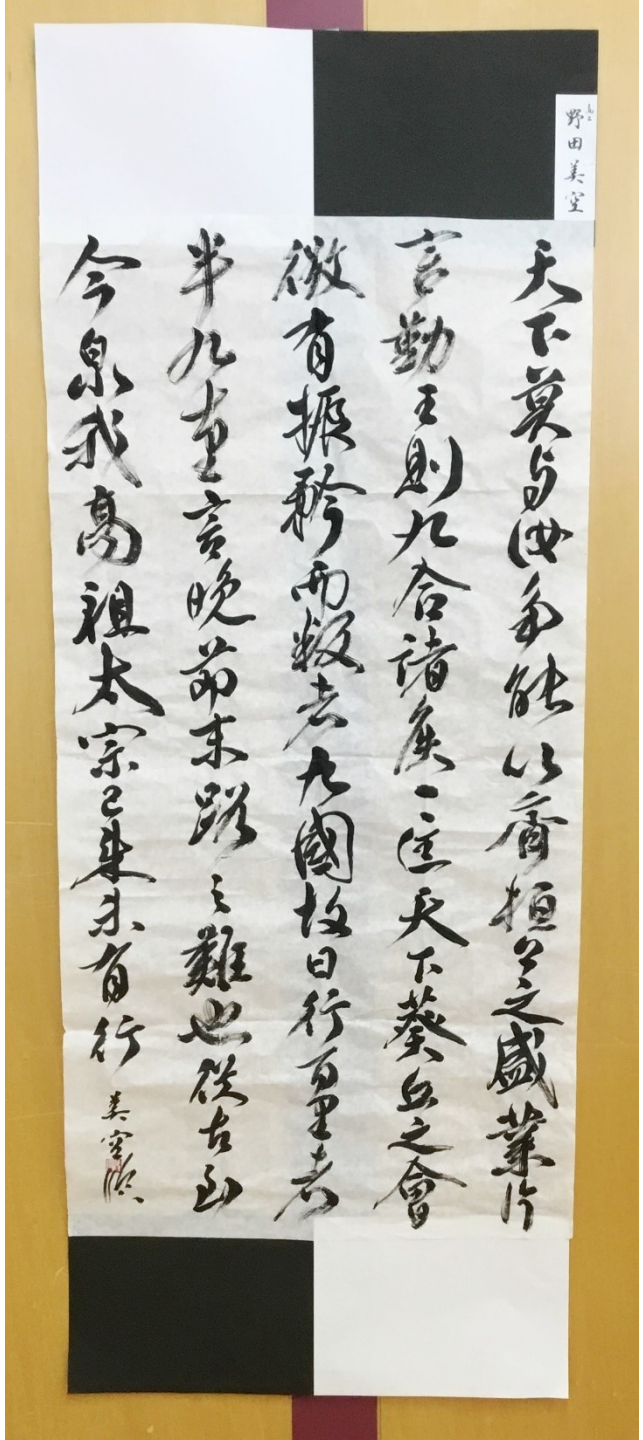
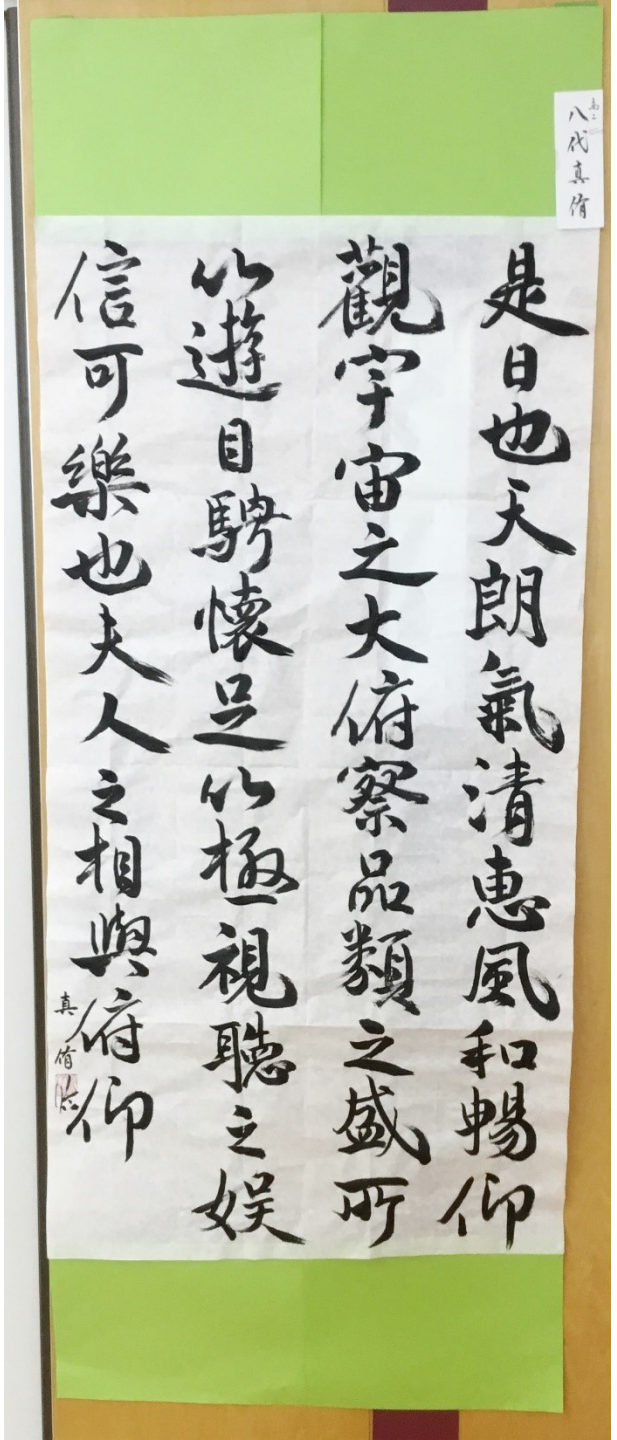
消火栓





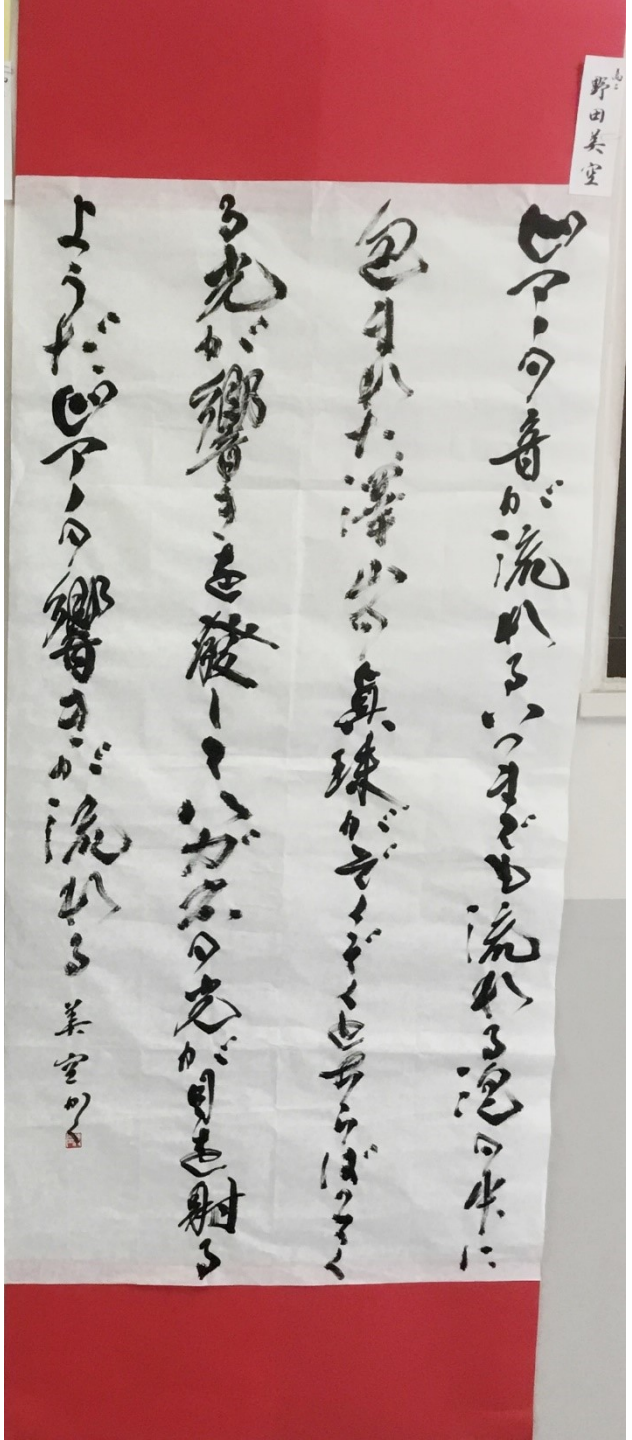
野田美室

天下莫日出而能以齎恒久之盛業作
言勤王則九合諸侯一匡天下藝亞之會
微有振矜而叛去九國拔日行百里去
半九里言晚節未踐之難也從古如
今泉我高祖太宗之業未有行 美室



八代真脩

是日也天朗氣清惠風和暢仰
觀宇宙之大俯察品類之盛所
以遊目騁懷足以極視聽之娛
信可樂也夫人之相與俯仰
真脩



野田美室

ピアノの音が流れる いつまでも流れる 港の夜に
色彩は深い 真珠がそくそくと 星からぱらぱらと
光が響き 感じて いつかの光が目を射る
ようだ ピアノの響きが流れる 美室

使持節司空公長樂王丘
穆陵亮夫人尉遲為亡

山里靜かな夜

皇帝避暑乎九成之宮此則隨
之仁壽宮也冠山抗殿絶壑為
池跡水架極分巖疎關

万人皆我師也

若葉は燃える

濁清風於後葉抗名節於
當時者見之弘義明

世艱寘忠臣彰於赴難銜須
授命結纓殉國英聲煥乎記牒
徽烈著於旂常豈若豐起

山光澄我心

謹全字景完敦煌效穀人也其先蓋周
之胄武王秉乾之機竊伐殷商既定爾勲
福祿被周封弟叔振鐸于魯國氏秦漢之
際曹參典輔王室世宗廓土斥竟

花盛り白い雲

八代 真澄

君は今誓い
愛する人の側で
幸せだよと微笑んでる
確かなその思いで
鐘が響くよ

長谷川 鈴花

日を開いて
初めての世界
不思議な
新しい世界
怖がらないで
夢に
どうぞ
このまま
満ちているのね
二人きりで
流れ星は
素敵な星の
明日を一緒に
海を
見つめよう

鈴花

野田 美空

素晴らしい
アンダーザ
シー
アンダーザ
シー
朝から
晩まで
ずっと遊んで
ラッキー

長谷川 鈴花

塩尾 蓮

夢
何度でも
醒めても
側にいる
言ってね
から
ほら
いつでも
出てね
思い

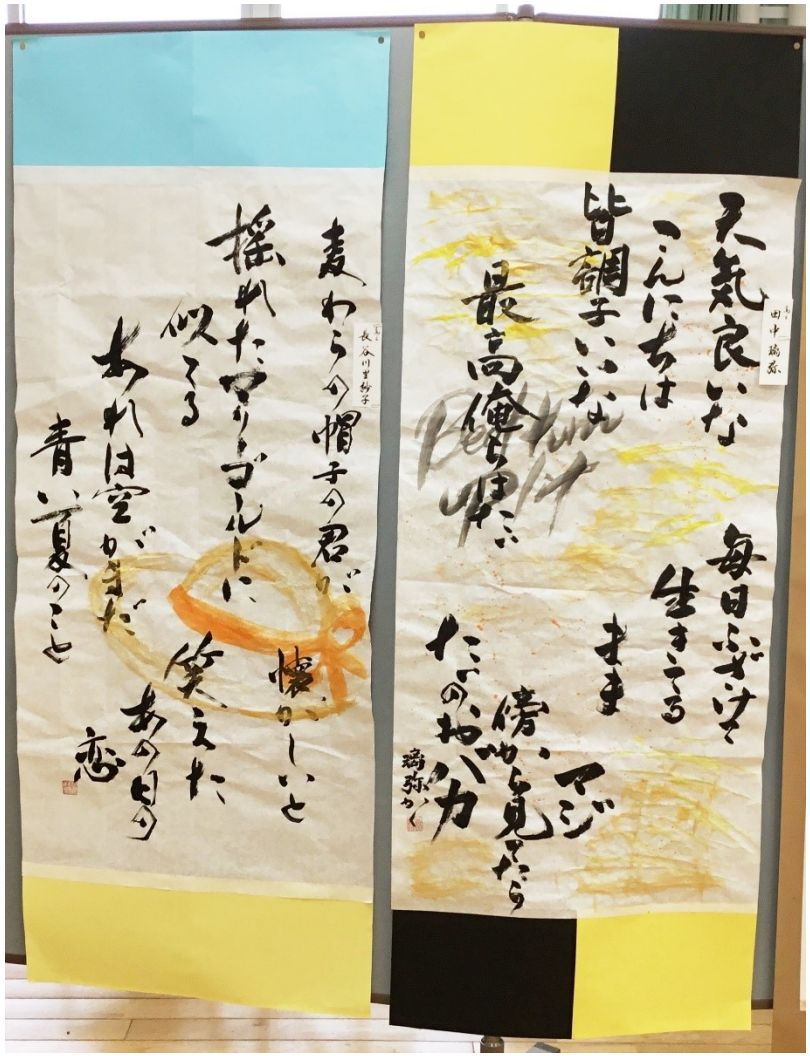
長谷川 鈴花

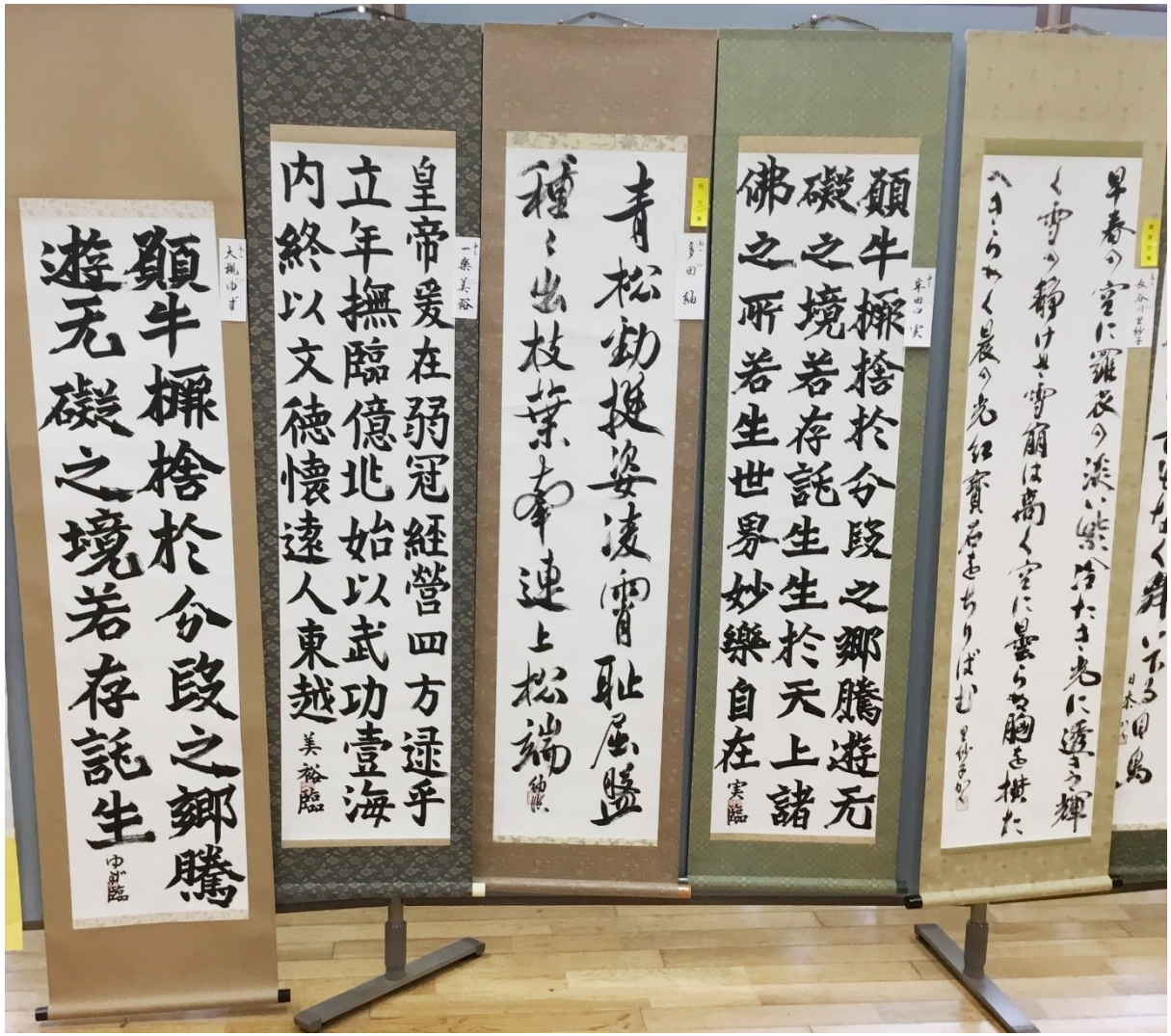
粤妙法蓮華諸佛之祕藏
也多寶佛塔證經之踴現
也發明資乎十力弘建在
於四依有禪師法号

鈴花臨

鈴花 日奈

太陽は美しく輝く
月は美しく輝く
二つ並び手をかたく組み合わせ静かに私
達は歩いていたかく誘ふもの何でもあらう
とも仏道の内の誘はる清らかな私は
信ずる伊東静雄の詩を日奈より


天気良いな
毎日ふぎけて
こんにちは
生きてる
皆調子いいな
ままマジ
最高傍から見たら
たくのおバカ力
麦わら帽子の君が
懐かしいと
揺れたマリーゴールドに
似てる
笑えた
あの日の
あれは空がまだ
青い夏のこと
恋


顕牛櫛捨於分段之郷騰遊无礙之境若存詫生
皇帝爰在弱冠経營四方逮乎立年撫臨億兆始以武功壹海内終以文徳懐遠人東越
青松劫挺姿凌霜耻屈賢
早春の空に羅衣の淡い紫
顕牛櫛捨於分段之郷騰遊无礙之境若存詫生生生於天上諸佛之所若生世界妙樂自在

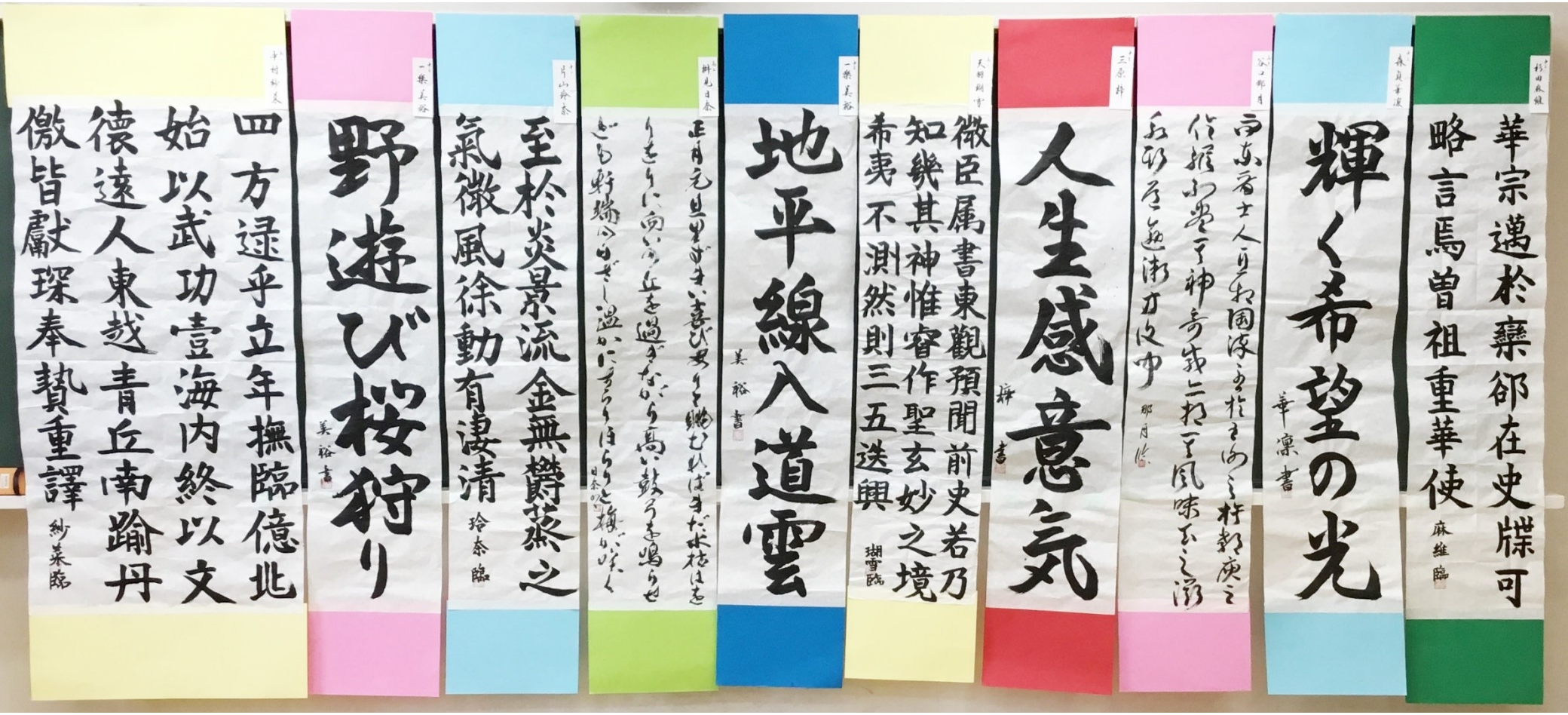
大使持節兼安南州諸軍事安南州
刺史上柱国 郡開国
侯長孫公清廉為芳 子
姪贈贊善大夫季明之靈
永遊生風標幼德宗廟瑚璉

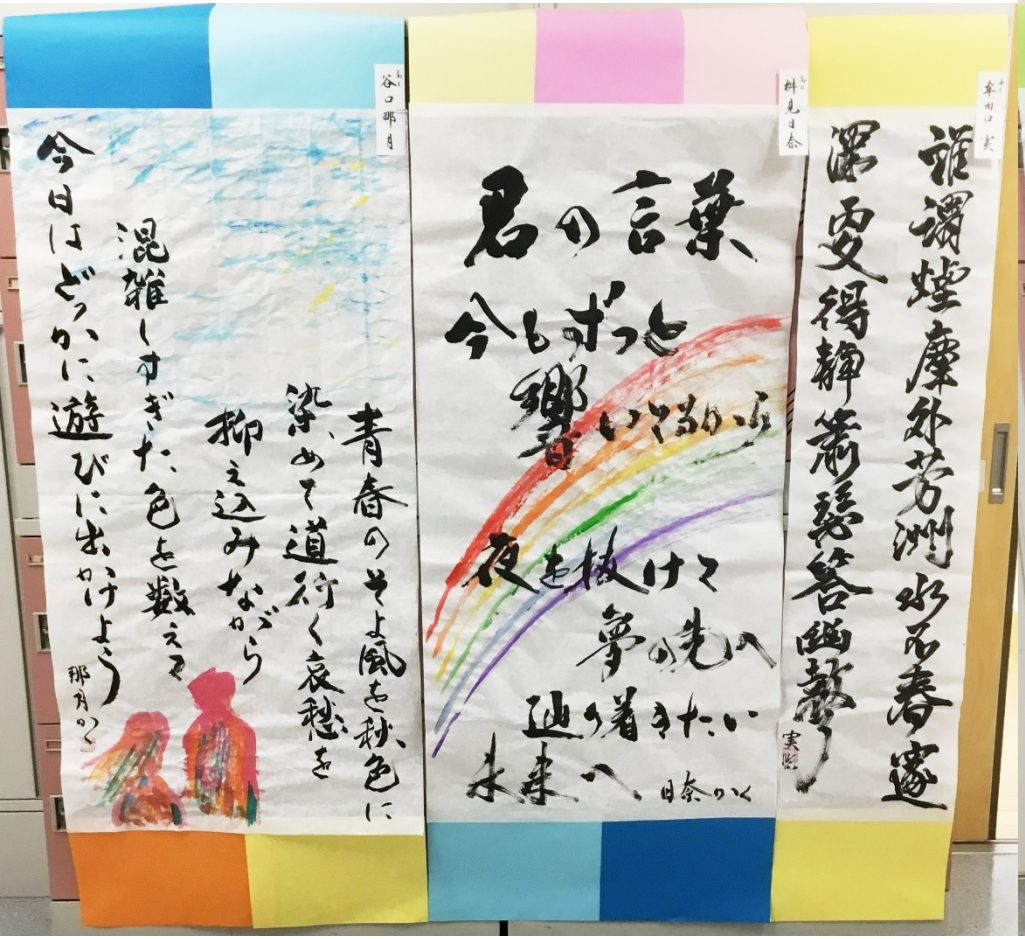
無道人之短無說己之長施人慎勿念受
施慎勿忘世譽不足慕惟人為紀綱隱心
而後動謙議審何傷無使名過實守愚聖
所藏在混賢不滯曖曖内含光衆弱生之
徒老氏戒剛彊行二鄙夫志慾二故難量
慎言節飲食知足勝不祥行之苟有恆久
自芬芳

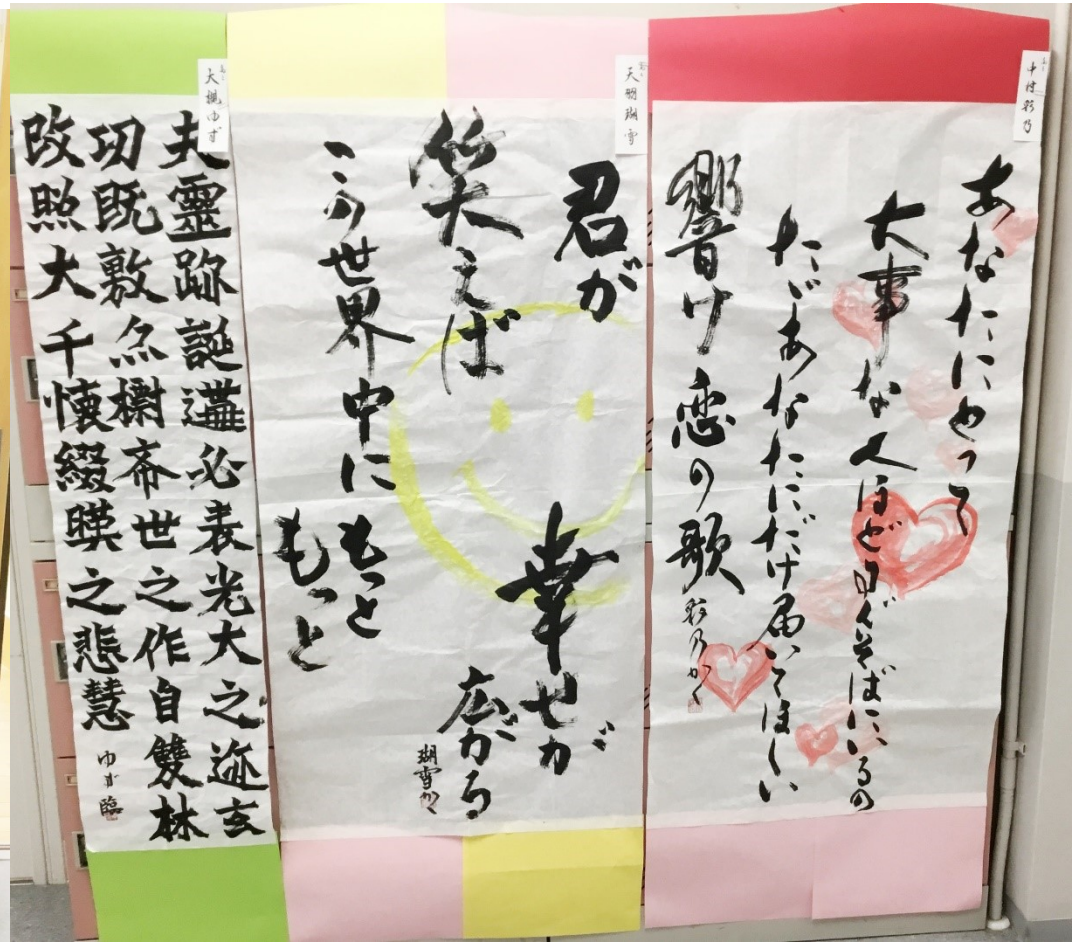
乙酉長至節 完白山民鄭 石如美室

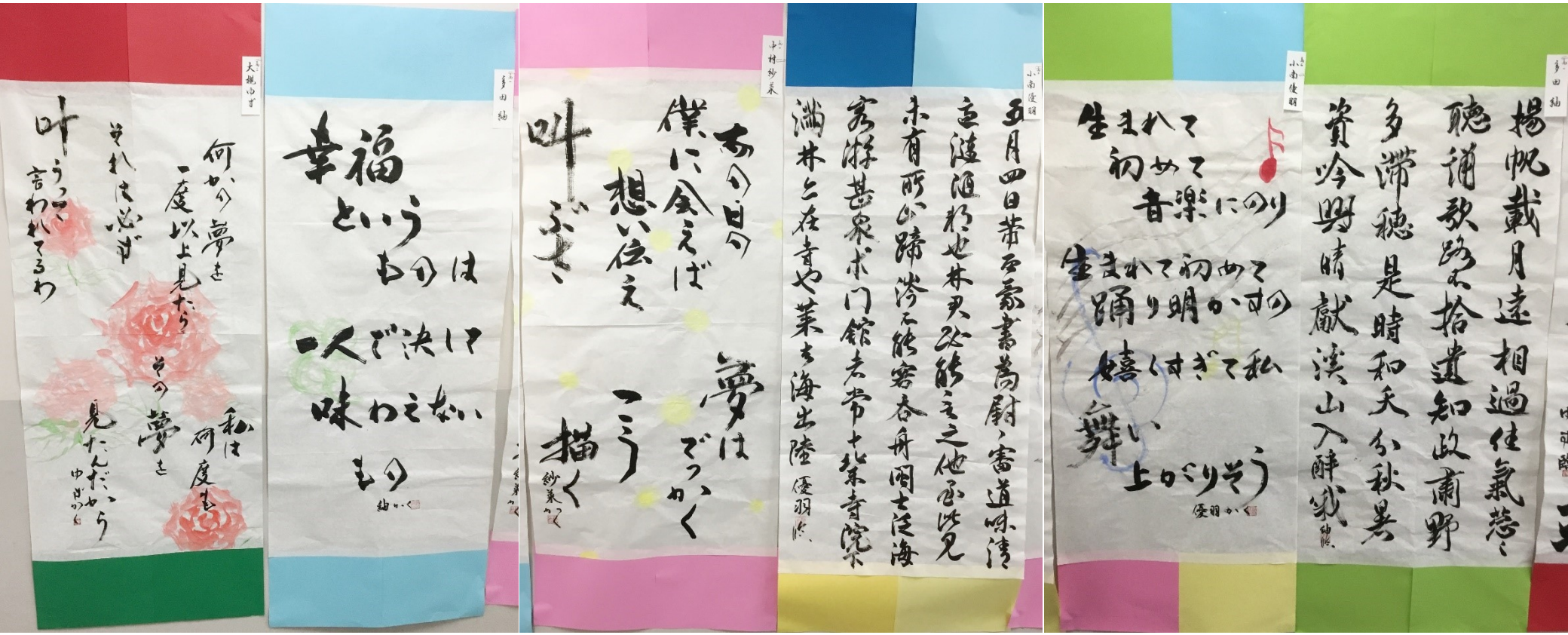
耕色なき碧海の上に蒼しく輝きて
夢む如き平淨上の眞晝濤重くおもむ
ろに空を吸へば夏雲はものうげに紺青
の水底に沈む晴しも如何あかる靜
寂の世界に音もなく舞ひ下る白鳥

日本 耕


華宗邁於藥郤在史牒可
略言焉曽祖重華使
麻維臨
輝く希望の光
華凛書
人生感意気
輝書
地平線入道雲
美裕書
野遊び桜狩り
美裕書
至於炎景流金無欝蒸之
氣徽風徐動有淒清
玲奈臨
四方逮乎立年撫臨億兆
始以武功壹海内終以文
德遠人東越青丘南踰丹
徼皆獻琛奉贄重譯
紗菜臨


谷口那月
青春のそよ風を秋色に
染めて道行く哀愁を
柳え込みながら
混雑しすぎた色を数えて
今日はどっかに遊びに出かけよう
那月作
林見日奈
葉
言
の
ずっと
君
今も
響いているから
夜を抜けて
夢の先へ
輝きたい
迫る未来へ
日奈作
幸田口美
漣漣螢燭外芳洲 好石春邃
深夏得韓蕭蕭答幽鬱
実紗


中村彩乃
あなたにとって
大事な人ほどすぐそばにいるの
だからあなたにだけ届いてほしい
響け恋の歌
彩乃作
天明瑞雪
君が
笑えば
幸せが
広がる
この世界中に
もっと
もっと
瑞雪作
大槻ゆず
夫靈跡誕邉必表光大之迹玄
功既敷忽樹斉世之作自雙林
改照大千懐綴暎之悲慧
ゆず臨


多田 紬
揚帆載月遠相過住氣慈
聽捕歌路々拾遺知政蕭野
多滞穂是時和天分秋異
資吟興晴獻漢山入酔戦
小南優羽
生まれて初めて音楽にのり
生まれて初めて明るすぎて私
踊り嬉しい
舞い上がりそう
小南優羽
五月四日芾石豪書高尉、審道味清
主渡酒形也林夫改能之之他西洲見
未有所以歸洲石能客春舟岡士泛海
家滝甚衆ボ門鎖去帯七北来青院不
淵井と在青や茉ち海出陸
村紗菜
あの日の
僕に会えば
想い伝え
叫ぶ
夢は
でっかく
こう
描く
紗菜かく
多田 紬
幸福
というものは
一人で決めるもの
味わえないもの
紬かく
大槻心音
何かの夢を
一度以上見たら
それは必ず
叶うって
言われてるわ
私は
何度も
その夢を
見たんだって
心音かく

新田桜子

弾ける
ように
顔や声も
好き、という
想う
だけで
文字が躍る
居ても立っても
いられない
桜子〆

中村彩乃

維貞觀六年孟夏之月皇帝避
暑乎九成之宮此則隨之仁壽
宮也冠山抗殿絶壑為池跡水
架楹分巖竦闕高閣周建長廊
起棟宇葛臺榭參差仰視則遊
薑百尋下臨則崢嶸千仞

彩乃臨

望月花

真面目な
顔は
新しい色に
染まるのは
好きだけど
桜だけで
分は見たくない
いい
花〆

大槻ゆず

澄神靜慮
具在筆端

ゆず臨